

活字の海で

小説『ユリシーズ』刊行100年

現代に通じる問題 包含



『ユリシーズ』は刊行100年を迎えたのを機に、記念論集の刊行やオンラインイベントが企画されるなど、作品を読み直す動きが広がる

20世紀アイルランドの文豪ジェームズ・ジョイスの長編小説『ユリシーズ』が刊行100年を迎え、記念論集の出版やオンラインイベントが相次いでいる。現代的な視点での読み直しや、研究者の分かりやすい解説によって、難解で知られる歴史的作品が読者にとって身近なものになることが期待される。

『ユリシーズ』はユダヤ系移民の息ない中年男性で広告取りのブルームを中心に、当時英国領だったアイルランドのダブリンでの1904年6月16日の一日を描いた物語だ。登場人物の心の動きなどを「意識の流れ」や「イメージの対置」といった手法で重層的に表現し、20世紀前半のモダニズム文学の流れに大きな影響を与えた。傑作とされる一方、「古語やスラング（俗語）が入り交じり、日本語でさえ内容の把握が難しい。研究会や授業で疑問を解消しない限り一人で読む進めるには限界がある」とジョイスを専門とする東洋学園大学の小林広直准教授は言う。

難解で読研できないという定評を覆そうと、2月に刊行された記念論集『ジョイスの挑戦（『最上』と『百年目の『ユリシーズ』』（松籟社）では、20世紀アイルランドの地理や社会情勢、歴史に関する詳しい解説も施した。2冊で合わせて20人以上の研究者が、多面的に再評価を試みている。

この小説が古代ギリシャの叙事詩『オデュッセイア』を踏襲したことの詳解、植民地での教育格差、動物の権利などさまざまな視点での論議がある。関西学院大学の横内一雄教授は、町をまよつづブルームに注目して「移民をどう『同胞』として受け入れるかという現代に通じる問題も浮かぶ」と指摘する。

若手・中堅研究者らはオンラインイベント「22nd see-James Joyce's Yurisy『ユリシーズ』への招待」を企画した。12月まで計22回、研究者らが三に一般読者に向けて各挿話の難所や魅力を講義する。記念論集の編著者を招いた2月の初回には、約400人が参加した。発起人の一人、安田女子大学の田多良俊准教授は「寄せられる質問やコメントから、研究者も新しい気づきを得られる。知識を共有する読書会に近い」という。

『ユリシーズ』には、当時の街並みや食生活、建築、音楽など多彩な事柄が百科全書のように埋め込まれている。「全てを理解しようとする、自分の関心にひきつけて読むのが楽しみ方の一つだ」と京都大学の南谷幸長准教授。難解な古典の間口は、研究者の伝え方でいくらかでも広がりそうだ。（渡部泰成）